

7 ティーカップの把手について (第3報)

把持実験Ⅱ

北海道大学 横山 尊雄
北海道学芸大学 ○前田 久子

カップの使い易さ、特にその中で把手と手一持ち易さについて分析する一つのメドは、最根源的な意味で使用感覚の過程にあると考え、実験Ⅰにおいては把持感の初步的な解答を得たが、更にその把持方法について追求を深めた。

把持方法は把手の形態、カップの形態、重量、把持者の手の寸法（指の太さ・長さ）など種々のものに規制されると考えられるが、その他に個人の習慣（くせ）のようなものも強く働くことが、Ⅰの写真観察の結果見出された。よって実験Ⅱでは、被験者男女各 35 人を対象にⅠの供試金カップを任意に把持させ、持ち方の特徴を調査した。その結果、著しいことは、把手の形態と持ち方の関係はある特殊なものをのぞき、大体どのような形態の把手においても、把持者の習慣（くせ）が先行するらしく思われる。しかしこれについては、尚総合的な検討を要するので後述する。

実験Ⅱのうち撰出カップ（Ⅰの供試カップの把手形態類別群と把持感を対称させて選んだ）については、Ⅱの被験者中男女各 20 人の把持状態を二面鏡により写真観察を行い、より詳細な分析を試みた。